

今思えば、三十年以上も前、五十歳前の事だと思う。まだ若かった、雪の上をバンバンと滑っていた。そんな時、スキー山岳部の顧問をやってくれ、といわれて引き受けた。それ位はできるだろう、と思っていた。

顧問の仕事とは、学生さんの合宿計画書や合宿の後の書類に判子をおすことであった。学生さんの本当の行動については、何も知らなかった。

五月頃かそんな時、スキー山岳部のリーダーから、「御在所岳で合宿訓練をやるから、付いて来て下さい。テントや寝袋や食料は、全部部員が運びます。体だけでいいです」そんな誘いがあった。御在所岳は近くの山で、何回も登った山である。標高は千三百米位であり、麓にある湯の山温泉から山頂まで、ロープウエーが設置されている。温泉街は、五百米位であり、実質八百米の山である。その当時、普通の早さで登れば休憩なしで、頂上まで行く体力はあった。気軽に考えて、付いていった。

温泉街まで車で行き、そこからテントが張れるような場所まで、三十分位歩いて登った。学生さんは、大きな荷物を背負って登っている。しかも、上級生よりも下級生の方が、荷物は大きい。私は空身である。この時は、この学生さん達の行動を見て、特に何も感じなかった。

テントの中で、持ってきた物で料理をして夕御飯を作ってくれた。その料理の準備に驚いた。肉は栄養があり必需品であるが、保存や運搬はむずかしい。味噌は栄養があり保存も利く。それで学生さんは、味噌の中に肉を積み込んで、山の上まで運んでいる。水さえあれば、肉も味噌も保存食となる。この方法は知らなかった。山登りは体力が消耗するので、肉料理は欠かせない。

テントの下はなるべく、平らな所を選んである、と思う。それでも布団の上には、程遠い。夜は持っている物は全部着たままで、寝袋の中に居てもなお寒い、それに背中が痛い。文句を言わずに、何度も目を覚まししながら、朝まで寝た。

朝食が済んだら、行動だ、訓練だ。荷物を、テントの位置に置いて、空身で沢登りの練習をする。沢登りは初めての経験である。大きな石が沢山あって、その間を水が流れている。水を避けながら石の上を登って行く。避けなければ、転んで全身水びたしになる。向こうの方に、垂直に、いきり立った岩壁がある。そこをロープを頼りにしながら登ってゆく人が居る。普段、こうした事に意識を持った事はない。しかし、学生さん達には関心があるようだ。

次は空身の登山だ。学生さんは、早い、早い。まるで、運動場を走ってい

るような早さで、山を走り登って行く。学生さんが荷物を持たずに、登り始めると、彼らの背中は数秒も過ぎずに、見えなくなる。今まで、学生さんと同じ早さで、山登りができると思っていた。学生さんが、自分の体重位の荷物を持って登ると、その時の早さは、空身の私が登る早さと同じになる、という事がわかった。大変な体力差である、と改めて思った。

どうやって、こんな体力を付けるのか。後で分ったことである。彼らは、リュックサックの中に何十キロもの石を積み込んで歩く練習を日常している、とのことである。体力がなければ、山の中で遭難をするという現実がある。この練習が山の遭難を避ける方法だという。

スキーと食料とテントを持って、雪がある冬山に登り、帰りはスキーで滑って降りてくる。これがスキー山岳部の学生さんである、少しづつ分ってきた。